

魯迅：中国「真の知識階級」の歴史的運命

(北京大学) 銭 理群

(東京大学) 代田 智明 訳

本文が検討するのは、「最後の十年」の魯迅である。これは魯迅研究において、最も大きな議論となったテーマであった。私は観点を換え、新たな考察を加えたい。

魯迅は1927年10月、『知識階級について』と題する講演を上海労働大学で行い、「真の知識階級」という概念を提示して、二つの定義をしている。「それは民衆に近いが、自分自身が民衆である」、「従って彼は、民衆のために不満を抱き、民衆の苦しみを人々に伝えることが確かにできる」。「彼らは社会に対して常に満足しないし、感じ取るのは永遠に苦痛であり、見て取るのは永遠に欠点である」。しかも「利害には目もくれず」「意見を表明するなら、思ったことを何でも言う」⁽¹⁾。これこそが魯迅の自己規定であり、彼は民衆の側に立ち、永遠の批判者——あるいは、1926年に書かれた『中山〔孫文〕先生逝世後一周年』の一文に言うように「永遠の革命者」⁽²⁾たろうとしたのである。

注意すべきは、魯迅はこの講演でさらに、「思想運動が実際の社会運動に変わる」問題を提示したことである。私の見るところ、以上二つの面、つまり「真の知識階級」に対する規定と追求、それに「思想運動」と「実際の社会運動」の結合とが、魯迅の「最後の十年」の思想、文学および社会活動を貫く、基本的手がかりの一つと思われる。

I.

我々がまず注目するのは、最後の十年の闘いの中で、魯迅が批判した矛先であった。

ある「些細な問題」から始めてもよからう。魯迅はかつてある文章で「厳正で正しい批評家」と「洞察が深く豊かな作者」に触れてこう述べてい

る。彼らはたいてい「ぴたりと」批判対象の本質的特徴をつかむことができ、「簡潔な渾名を制作し」、「顔つきはそっくり」で、「こうしてその人物とともに空の果てまで駆けめぐるのだ」。

このように保存できる「渾名」に、「五四時代のいわゆる「桐城派の奇形種」と「文選学の魔物」があり、現在ではこれに匹敵するのに、「租界の悪ガキ」と「革命小売人」〔後2者はともに魯迅が論敵に付けた渾名〕を推薦できるくらいだろう」と魯迅は述べている。そのことばに続けてこう言う。「前者の組合せは、古の「京」〔北京〕から出たものだが、後者ののは今の「海」〔上海〕から出たものだ」⁽³⁾と。

我々はつぎのように言えないだろうか。魯迅は五四時期に『新青年』の戦友たちと、主に「古の「京」」が代表する伝統中国文化に対する批判に力を注いだが、30年代になって、魯迅がより注目したのは、「今の「海」」が代表する現代中国文化に対する批判的考察であったと。

我々が知るように、30年代中国では、上海を中心とする南方都市に、工業化、商業化のプロセスが生まれ、西洋モデルに従って造られた近代都市が、奇形な発展を遂げていた。上海百華門ダンスホールや国際飯店などの建築物に現れるような消費文化が、極端に膨張していた。このような「近代化の新しい波」が多くの文学者の描写対象となり、人々がよく言う、文学のモダニティの重要な側面を形作っていく。

だが「真の知識階級」の一人として、魯迅独自の所は、まさしく彼が「見て取るのは永遠に欠点」だということであった。彼は、批判的な、疑惑の眼差しで、人々が「普遍的」と考えた近代化の流

れを照射したのである。そしてその表面的な繁栄、発展の背後に隠れたものを暴き出したのである。

魯迅には早くもこの世紀初め、『文化偏至論』などの著作のなかで、西洋工業文明に対して行った理論上の批判的考察があった。そうであれば、30年代には、このような現代都市文明の西洋モデルが、いくたの変形を経たにせよ、既に魯迅自身の生きる具体的環境となり、彼の感覚と批判は自然とより切実なものとなる。一人の文学者として、彼の批判は、このような現代都市文明の土壌から生み出された、新しい社会的典型に対する観察、描写を通して、実現したものなのである。しかも先の文で言うように、彼は常に「ぴたり」とした「渾名」によって概括するのであった。

そこで魯迅の筆のもとでは、「資本家のみすばらしい走狗」が登場する。数年来、人々は魯迅と梁実秋との論争について語ることが多いが、二人の間の実質的な差異については無視（回避すら）している。梁実秋はつぎのように、あからさまに言い立てていた。

「資産制度を攻撃するのは、つまり文明に反抗することだ」。「一人の無産者が、もし見込みがあるなら、苦勞してまじめに一生働かさえすれば、いくらかそれなりの資産を手に入れることができるだろう。これこそが真っ当な闘争手段である」⁽⁴⁾。

魯迅からすると、資本奴隷制度を合法化するような説教は、まさしく圧迫された労働者に対する、意識的なベテンであった。「はい上がれる者は少ないのだが、一人一人はそれが自分だと思い込んでいるのだ。こうして、おとなしく田を耕し、畑に鋤を入れ、堆肥を担ぐのである」。「自分の仇は上ではなくて、周り——同じように這っている人々だけだと決めてかかる。彼らはたいい何もかも耐え忍んで、両手両足を地べたにくっつけ、一步步押し合いへし合いをし、休むことがない」⁽⁵⁾。

梁実秋（それに同類の知識人）が、無条件に容

認し、美化した資本主義の「自由競争」の背後に、魯迅が見て取ったのは、そのような血の滴る搾取と軋轢であった。「人肉を食う宴席」はまさしく「資本」の名のもとで、準備され続けていく。そして「梁実秋教授」たちは、堂々たるご立派な「理論」によって「悲惨な弱者の叫びを覆い隠そうとするのだ」⁽⁶⁾、これはもとより、魯迅に決して容認できることではなかった。

そこで、魯迅は現代都市文明のなかに、圧迫と奴隷関係の新たな再生産を発見するのである⁽⁷⁾。新しい奴隷制度を弁護する一切のたわごとは、彼の手で容赦ない批判に晒された。魯迅はある文章のなかで、こんな一篇の「高論」を暴き立てている。「本国の資本家の道理のない抑圧に反抗せよ」。

魯迅はずばりと指摘する。「これは実質的に「道理がある抑圧」を言い立てているのだ、いわゆる「道理がある」とは、抑圧された労働者に「じっと耐え忍んで働き、生産を高めなければならぬ……とりわけ危急の時に配慮し、労使間は真の協力に勉め、労使間で一切のトラブルをなくさなくてはならぬ」ことを求めているのである」⁽⁸⁾と。

圧迫された民衆、弱者の側につねに立った魯迅は、このように「抑圧に理論がある」こと自体、一種の精神的圧迫であると鋭く見抜いていた。「剣もペンもない弱者」が「息もつけない」ため、いま彼は一本のペンを駆使して、もとより反抗しようとするのだ⁽⁹⁾。

魯迅はこのほかにも、30年代中国の社会構造のなかから、「外国人の召使い」を発見する。早くは1927年に、彼の見取った香港社会をつぎのように描いていた。

「真ん中に何人か外国人の主人、部下はその徳を讃える「高級中国人」若干名、それと手先の奴隷同胞の一味。このほかはすべてじっと黙って苦しんでいる「土人」だ。耐えられる者は、この外国人租界で死に、耐えられない者は山間に逃げ込んだ。苗族、瑤族は我らが先輩である」⁽¹⁰⁾。

その後も彼は、その眼に映った上海租界を、つぎのように述べている。「外国人が真ん中におり、その外側に、通訳、特務、警官、召使い……の類の一群が取り囲み、彼らは外国語を理解し、租界の規約をよく知っている。その周囲の外に、多数の庶民がいるのだ」¹⁴¹。

五四の時期に魯迅は、中国伝統社会のなかで尖塔型の封建等級制度を暴いていた。「貴賤の差があり、大小の差があり、上下の差がある。自分も人に虐げられるが、人を虐げることでもある」¹⁴²。いまや彼は中国現代都市社会に、今度は輪円型等級制度の再生産を見つける。注目に値するのは、魯迅はこのような上海租界の社会構造から、文学発展に対する一つの構造的提示を引き出したことである。

「梁実秋にはバビットというのが、徐志摩にはタゴールというのが、胡適にはデューイというのが、創造社には「革命文学」という流行りの文学がある」¹⁴³。ここではあいも変わらず、誰かの外国文学を中心とし、それに依存する関係が存在している。——魯迅とて外国文学に対して「持ち込み主義」を主張していた。だが問題は、このような「持ち込み」は、必ず「視線を拡げ、自分で持ち込む」のであり、自主独立性がなければならなかった。もし叩頭礼拝の対象と変わり、外国人に寄生しつつ、これによって自国人の眼を眩ますとしたら、それは文学の一種の等級関係を作り出すことになるのである。

魯迅からすれば、西洋に対するこのような依存があまねく存在していた。著名な『「友邦あきれ」の論』のなかで、彼はつぎのように、中国の政治構造を指摘している。我々には「どのような党国、どのような「友邦」があるのか。「友邦」は、我々人民の身が引き裂かれても、まったく声もあげさせず、我々がほんのすこし枠を越えと、殺戮を加えるのだ。党国は、我々にこの「友邦の人士」の希望を遵守するよう求め、そうしないと、

「各地の軍政当局に打電し」、「すぐに緊急措置を取るように。押さえるすべがなく、何とかごまかすという口実は事後に使わせない」となるのだ」¹⁴⁴。ここでいう党国とは、まさしく30年代の中国政権にあった国民党「一党独裁」の本質を正しく概括している。「党国」は表向き独立はしていても、実際上は「友邦」つまり西洋植民地主義や帝国主義に依存し、その命に従っている。このようにして、魯迅は30年代現代中国の政治、社会、文化構造の中に、一種の「半植民地性」を見出す。これはつまり、中国30年代の近代化過程は、「半植民地化」を相伴っていたことなのである。この歴史的事実を避けることはできない。

「外国人の召使い」は、このような土壌で生まれた。上海バンドの外国人の買弁や租界の警官の憎むべきは、その職業にあるのではなく、その「あり様」にある、と魯迅は言う。「あり様」は内心世界の外在的表現であった。彼らは「外国人勢力は、多数の中国人より上で、自分は外国語ができるし、外国人に近いので、多数の中国人より上だ、と思うのだ。だが自分は黄帝の子孫でもあり、古い文明があり、中国の事情に通じているので、外国の奴らより勝っている。だから多数の中国人より勢力が上の外国人より勝っているとも思うのである」。だから魯迅は、外国人の召使いは「中外の間をうろうろし、主奴の間を往来する」、その実質は東西双方の権勢に依存し、このため二重の奴隷なのだが、これを元手に同胞を奴隷化する、これが彼らの許し難い、憎むべき点であると言う。注目に値するのは、外国人の召使いは、外国を飯の種にしているのに、伝統にやたら憧れることを魯迅が特に強調していることである。「むしろ彼らは国粋家であり、暇さえあれば、胡弓を引き、『楊四郎]母を尋ねる』を唱う。出勤の時は制服だが、退勤の時は中国服に着替える。たまの休みに遊びに出ると、金持ちは緞子の靴に、絹の上着である」¹⁴⁵。

魯迅がこうした表面的現象を通して見て取ったのは、新旧2種類の文化的混淆であり、新しい奴役関係のなかに、あい変わらず古い奴役関係が残され、発展していることであった。魯迅は「多数の中国人」すなわち大多数の中国の庶民の立場に立ち、現代中国社会のなかで、中国人が三重の圧迫を受けていることを発見したのだ。中国の伝統勢力、伝統統治者の奴隷であり、西洋植民地主義統治の奴隷のうえ、その二者に依存している外国人の召使いの奴隷でもある。この三重の奴隷状態の発見は、目を見張るべきことであった。

上海バンドには、ほかにも「租界の悪ガキ」がはびこっていた。魯迅はこう言う。彼らは文人ではあるが、文学論争では「しっかりした理由」を述べられない、「根拠のない誣告や自分の憶測のほか、ダダをこね、間抜けの振りをするだけ」⁽⁶⁾で、これでこそちんぴらの雰囲気が出ると。

かつて魯迅は、つぎのように上海バンドのちんぴらを描き出していた。「和尚が酒を飲むと彼が殴る、姦通した男女は彼がとつかまえる、闇の娼婦や密売人は彼が辱める、社会改革者は彼が憎悪する、秩序を溺愛するがためである。ただし背後には伝統の後ろ盾があり、相手が堂々たる強敵でなければ、彼はその間で我が物顔に振る舞うのだ」⁽⁷⁾。見たところ、上海のごろつきも伝統を後ろ盾にし、外国人の「規定」を頼みとしたが、最も基本的な職責は、現存の「秩序」を守ることにあった。そこで魯迅は言うのである。「植民地政策は必ず、ごろつきを保護し、育成する」⁽⁸⁾と。

こうして「ごろつき文化」も、30年代上海都市文明の有機的部分を構成したのである。魯迅は言う。その特徴は、「中国式」と「外国式」とを一身に集めることで、これは西洋文化と中国伝統文化中の最低最悪部分によって、悪性の接ぎ木をしたと言えと。また魯迅は言う。「古今を問わず、いつも定まった理論はなく、あるいは主張の変化についても尋ねる筋道がなく、その時々各種各

派の理論を手にして武器にする人、これを称してごろつきと言えよう」。

ごろつき文化の最大の特徴は、理論も、信条も、教養もないことであった。「ルールなどどうでもよい。彼にびた錢を巻き上げられてそれで終わりなのである」⁽⁹⁾。従ってごろつき文化の「横行」自体が、社会の腐敗や無秩序、混乱を表しているのであった。これは実際「末期的現象」であり、魯迅の言うように、「これらはもともと上海バンドに長い間浮き沈みした水死体で、元来あちこちにあったのだが、風浪のおかげで1カ所に集まり、1カ所に堆積し、それぞれの腐乱によって、些か濃厚な悪臭を発してきたのである」。これもまた魯迅が見事に言っているように、このような「水死体文学は、やはりごろつき政治と同時に存在しているだろう」⁽¹⁰⁾。

一人の徹底した批判的知識人として、魯迅の最大の特徴は、現代文明に対する批判において、最終的には、知識人自身に対する批判的考察に帰結することであろう。中国的な近代化プロセスにおかれた知識人は、伝統的知識人が「お上の助け手、幫閑」になるという歴史的宿命を抜けきれないだけでなく、さらに新しい危機に直面していることに、彼は気がつくのだ。

20世紀初頭、魯迅は既に物質的欲望の一面的な追求は、人を物質の奴隷にってしまうという警告を発していた。しかも「大衆政治」を誇張する力も、新しい危険を生み出すだろう。いまや30年代という、すべてが商品化し、マスメディアがすべての現代社会を覆い尽くし、さらに「大衆」を神聖化する時代の新しい流れにあって、魯迅は再び、知識人が「商業の助け手、幫閑」と「大衆の幫閑」になってしまう陥穽を見て取ったのである⁽¹¹⁾。

このため、この3種のタイプの「助け手、幫閑」に対する批判が、魯迅の30年代における文化批判のなかで重要な構成要素となった。これは人の攻撃を最も受けやすく、現在までもまだ止んでいな

い。——魯迅自身がとくにドイツのマルクス主義者のことばを引用していた。「悪化していく旧社会のなかで、もし誰かが少し異なる意見を抱けば、少し疑念の考えを抱けば、きっとひどい目に遭うだろう。攻撃し危害を与えるのが最も激しいのは、その人の同じ階級である。彼らはこれが一番恨むべき反逆だと思い、別の階級の奴隷反乱より憎み、きっと彼を取り除こうとするに決まっている」⁸⁴。

様々な助け手、幫閑文人に対する魯迅の批判は、確かに現代中国知識人集団に対する彼の反逆性と異質性を明示している。しかし知識人が近代中国において、三重の奴隷に陥ったという現実には彼が直面したとき、その内心の落ち込みは隠しようもなかった。彼の情け容赦のないあらゆる批判は、一種の自分に対する警戒だと見なせないこともないのである。

II.

上海バンドの「革命悪徳商人」、「革命小売人」⁸⁵と「革命人夫頭」⁸⁶、「奴隷の元締め」⁸⁷についての発見は、魯迅自身にとって、あるいはより重大な意味を持っていたかも知れない。

魯迅は既述の『知識階級に関して』という講演のなかで、「思想運動が実際の社会運動に変わる」のは偶然でないことを強調していた。これより前、黄埔軍官学校での講演で彼は、「一篇の詩は、孫伝芳を脅かすことはできないが、一発の大砲は、孫伝芳を追い払うことができる」⁸⁸と述べたとき、すでにこの方面の情報を明らかにしていたわけである。

1927年蒋介石政権が、革命青年を虐殺した「血のゲーム」の後、魯迅はより痛切に「ちょっと改革めいた主張は何でも、社会と関わらなければ、「無駄話」として残ることができるが、万一効果があると、提唱者はおそらく苦しむか殺されるかの災厄を免れまいと理解した」⁸⁹。これこそ単純な

啓蒙運動に対する痛苦なる省察であり、魯迅のような批判的知識人に、実際の反抗する社会運動と結びつく必要を感じさせたのである。まして魯迅はつねに、社会底辺の民衆に深い理解と同情を抱いていた。

民衆の反抗を恐るべき元凶と見なす「特殊な知識階級」とは異なり、魯迅は被圧迫民衆の反抗の合理性に対し、疑いを入れたことがなかった。彼には「抑圧されたら、どうして闘わないのか」⁹⁰という名言がある。このため彼は後に、国民党一党独裁に、当時の中国で唯一反対した共産党が指導する労農革命運動に対し、共感と支持の態度を採ったのである。しかも共産党人士と協力し、左翼文芸運動を起こしたのも、一種の自覚的な選択であった。

彼は、若い革命文学者が、民衆の解放を勝ち取ろうという自分の信念のために、血を流す犠牲となるのを目にし、より強い熱意によって心からの賛嘆の辞を送っている。「プロレタリア革命文学と革命の労苦の大衆は、同じように圧迫を受け、同じように惨殺され、同じような闘いを行い、同じ運命にある」⁹¹。これは、既述の一般庶民の立場に立ち、永遠の革命者になるという「真の知識階級」の定義と、全く一致する。こうも言えるかも知れない。「真の知識階級」の一人として、ほとんどこのような選択は必然であったと。

だが魯迅は、ロマンティックな幻想を抱いたり、さらには投機的心理によって、革命に参加した知識人とも明らかに違っていた。彼は民衆が反抗する社会運動を理想化し、なおさら神聖化したことは、今までなかった。これは太陽社、創造社の「革命文学者」とは根本的に異なることである。

彼は、革命の「ユートピア主義」を放棄するよう、革命は汚れと血に満ちているが、同時に幼児も擁していることを正視するよう、度々人々に注意を促している⁹²。しかも彼は最初から、一旦社会の実践活動に参加すれば、利用される可能性が

あることを深く知っていた。彼には自分がこのような選択をするからには、必ずそれに応じた代価を支払わねばならないことはまったくはっきりしていた。ひとりの永遠の批判者として、彼は社会の実践活動に加わる一方、中国という土地で起こる社会運動(改革や革命)のありうる方向を、張りつめた気持ちで、観察し、思考していたのである。

早くは1926年に書かれた『学界の三魂』のなかで、彼は中国史上の「匪」とは、いわゆる「農民革命軍」だと、取りわけて考察している。そしてある学者の意見を引用して、農民革命は根本的に封建奴役制度を変えることはできないし、「自分が皇帝を堪能」しようとする指摘している。ここで得られた結論が、「中国で一番儲けの大きい商売」は「謀反」だということであった⁸⁰⁾。実際魯迅の『阿Q正伝』が描いたのも、このような「謀反」なのであった。

いまや30年代のいわゆる現代革命において、彼は「革命悪徳商人」と「革命小売人」を発見する。いわゆる悪徳商人は、「共産青年や共産嫌疑の青年の血」でもって「大きな商売」をするもので、小売人の間口はちょっと小さく、騒いで飯の種にする程度だが、やはり同志を売って投機しようとする。

そこで、魯迅は「人肉の宴席」がいまだに準備されており、口実が今回は革命であるのにすぎない、と見て取ったのである。このことによって、魯迅は再度、彼の「阿Q謀反」に関するテーゼに戻らざるを得ない。この世を去る3カ月前になって、彼はある書簡のなかで、あまたの評論家が彼が『阿Q正伝』を書いた「意図」を理解できないことについて、感慨がおさまらないと述べている⁸¹⁾。だが「意図」は彼がとっくにはっきり述べていた。「今後もし改革があったら、私はきっと阿Qのような革命党が現れると信じている。私だとして、人々の言うように、私が書いたのが今より前のある一時期であって欲しいけれども、私が見たもの

が現代の前身ではなく、その後あるいは2, 30年後のことではないのかと思うのである」⁸²⁾。この文章の行間に隠れた大きな憂慮は、たやすく分かるであろう。

しかも魯迅自身が、中国共産党上海組織の責任者との接触の中で、たちまち新たな抑圧を感じ取った。彼は友人への手紙のなかでこう語っている。「私自身に言わせれば、一本の鉄の鎖で縛られている感じです。一人の人夫頭が、後ろから鞭で私の背を打つのです。私がどんなに一生懸命やっても打つので、振り返って自分の悪いところを聞くと、彼は両腕を組み合わせて丁重に言うのです。ご立派にやってらっしゃる。そちらとの気持ちもまこと通じあっています。今日はお天気がはっはっはっ……。まったく手の着けようがありません。他人には私たちに関わることは話してはいません。外国人に対しては、避けて話しませんし、やむを得ないときは嘘をつくことにしています。これがどんな辛いことかお分かりでしょうか」⁸³⁾。

彼はさらに赤裸々に提示している。これらの「自分は革命家だと思っている大人物」⁸⁴⁾は、「1本の旗をつかみ、自分は頭一つ突き出ていると思い込んで、奴隷の元締め役を振る舞い、鞭を叩くのを唯一の功績としているのです」⁸⁵⁾。ここで魯迅は再度新たな奴役関係の再生産を見出している。しかしそれは、既述の現代奴役制度の反抗者によって造り出されたものだから、もとより、より重大で、より瞠目すべきことであった。

魯迅にとって言えば、これはいずれも彼の同盟者なのである。一方で、現行の奴役制度に対する彼らの反抗に共感し支持しながら、一方で彼ら自身が形成しようとしている新たな奴役制度に反抗し、後ろから射られる闇矢を防がねばならない。魯迅は「手の着けようがない」とすら感じているのだ。四面から来る敵に直面して、彼は「左右に動いて闘う」[横戦]しかない。「前後をあれこれ気にするのは、ひどく労力が要ります」⁸⁶⁾。

しかし一切の奴役と抑圧に反抗し、「利害には目もくれず」「思ったことを何でも言おう」とする「真の知識階級」である魯迅にとって、他に道は選びようがなかった。彼の環境を心配した友人に対して、彼は何度も述べている。これは決して、個人間のことではないので、必ず明らかにしなければならない。「そうすれば、中国の文学芸術の前途には幾ばくか希望があるでしょう」⁹⁸。

魯迅はこれらすべての後の結果は分かっていたし、彼は自己の運命に対して火のように明らかに洞察していた。友人に宛てた手紙のなかでこう書いている。「もし旧社会が崩壊せし時、なお幸いに生存していれば、赤いチョッキ〔当時の掃除夫のユニフォーム〕をもらって、上海の大通りを掃除するのみ」⁹⁹。

しかしたとえそうであっても、魯迅はなおこれらの革命者を支持しようとした。現実の中国において、彼らがあい変わらず唯一の反抗勢力だったからである。その間のこの「苦境」は、確かに後の者には理解しづらいことであった。

魯迅は「左右に動いて闘う」なかで、生命の最後の瞬間までそれを貫いたとすることができる。だが彼が残した遺言は「私の怨敵は多いと言うべきだが、もし新式の人が来て私に聞いたらどう答えるか。私はちょっと考えて、決めたことは、彼らには恨ませておけ、私も一人たりとも許さないということである」。

魯迅にとって言えば、これは論争中の是非を貫くだけでなく、彼の「真の知識階級」という立場を貫こうとすることであった。永遠に庶民の側に立ち、あらゆる方面の、あらゆる形式の抑圧と奴役に反対する。「社会に対して、つねに満足しない」、従って永遠の批判者である。——私にはこれこそが、魯迅の我々に対する最も大切な啓示だと思われるのだ。

2001年12月5日 楓丹麗舎にて誌す

[注]

- (1) 『魯迅全集』（以下『全集』と略す）第8巻（人民文学出版社、1981年版）188, 190, 191頁参照。
- (2) 『全集』第7巻、294頁参照。
- (3) 『五論「文人相軽」——明術』、『全集』第6巻382—384頁。
- (4) 梁実秋『文学是有階級性的嗎？』、『恩怨録：魯迅和他的論敵文選』（今日中国出版社、1996年）588, 589頁。
- (5) 魯迅：『爬与撞』、『全集』第5巻、261頁。
- (6) 『灯火漫筆』、『全集』第1巻、217頁。
- (7) 魯迅は、現代の教育、メディア、ビジネス、文化、学術のすべてに、このような圧迫、奴隷関係の再生産を見出している。この問題は、重大で複雑なため、別に専門に論ずべきことであり、本文では省略する。
- (8) 『從盛宣懷說到有理的压迫』、『全集』第5巻、133頁。
- (9) ここでは、陳西滢たちとの論争当時の魯迅の言い方を借用している。『我們不能「帶住」』、『全集』第3巻、244頁参照。
- (10) 『再談香港』、『全集』第3巻、541頁。
- (11) 『現今的新文学的概観』、『全集』第4巻、133頁。
- (12) 『灯火漫筆』参照、『全集』第1巻、215頁。
- (13) 『現今的新文学的概観』、『全集』第4巻、134頁。
- (14) 『全集』第4巻、361頁。
- (15) 『「題未定」草（二）』、『全集』第6巻、354—355頁。
- (16) 『撲空』、『全集』第5巻、351頁。
- (17) 『流氓的変遷』、『全集』第4巻、156頁。
- (18) 『「民族主義文学」的任務和運命』、『全集』第4巻、311頁。
- (19) 『上海文芸之一瞥』、『全集』第4巻、297—298頁。

- (20) 『「民族主義文学」的任務和運命』、『全集』第4巻, 312頁。
- (21) 『門外文談』、『全集』第6巻, 101-102頁。『帮忙文学与帮閑文学』、『全集』第7巻, 382-384頁。『從帮忙到扯淡』、『全集』第6巻, 344-345頁などを参照。
- (22) 『二心集・序言』、『全集』第4巻, 191頁 [ドイツのマルクス主義者とは, メーリング (1846-1919) のこと]。
- (23) 『答楊邨人先生公開信的公開信』、『全集』第4巻, 629-630頁。
- (24) 胡風宛て『書信・350912』、『全集』第13巻, 211頁。
- (25) 『答徐懋庸並關於抗日統一戦線問題』、『全集』第6巻, 538頁。
- (26) 『革命時代的文学』、『全集』第3巻, 423頁。
- (27) 『答有恒先生』、『全集』第3巻, 457頁。
- (28) 『文芸与革命』、『全集』第4巻, 83頁。
- (29) 『中国無産階級革命文学和先驅的血』、『全集』第4巻, 283頁。
- (30) 『「毀滅」第二部一至三章訳者附記』、『全集』第10巻, 336頁。
- (31) 『全集』第3巻, 207頁。
- (32) 沈西苓宛て『書信・360719』、『全集』第13巻, 397頁。
- (33) 『「阿Q正伝」的成因』、『全集』第3巻, 379頁。
- (34) 胡風宛て『書信・350912』、『全集』第13巻, 211頁。
- (35) 曹靖華宛て『書信・360515』、『全集』第13巻, 379頁。
- (36) 『答徐懋庸並關於抗日統一戦線問題』、『全集』第6巻, 538頁。
- (37) 楊霽雲宛て『書信・341218』、『全集』第12巻, 606頁。
- (38) 王冶秋宛て『書信・360915』、『全集』第13巻, 416, 426頁。
- (39) 曹聚仁宛て『書信・340430』、『全集』第12巻, 397頁。また李霽野が1936年11月11日に書いた追悼文『憶魯迅先生』中の回想によると, 魯迅はかつてF (馮雪峰) 君にこう言っている。「君たちが来たとき, 私は逃げようと思った。真っ先に殺したいのは私だろうからね」。それによれば, F君はこのことばを聞いて「慌てて首や手を振り, そんな訳ないです, ないです」と言ったという。李の文は、『魯迅先生記念集』「悼文」第1輯, 68頁。1979年上海書店が1937年初版本に基づき複印。

◆図書館休館のお知らせ◆

2002年8月7日(水)～16日(金)は図書館を休館させていただきます。
レファレンスサービス等もお休みさせていただきますのでご了承ください。
上記期間中お急ぎのご用事のある方は、電話(03-3947-8029)にて直接
お問い合わせください。

通常火曜日は休館日ですが、8月6日(火)は開館いたします。

中国研究所図書館